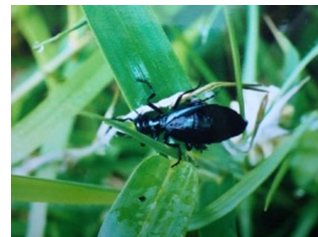


## 毒に注意

### 1. ヒメツチハンミョウ

花が賑やかになる時期に出会う甲虫の仲間です。独特の生活史を持つことで知られている虫ですが、ハンミョウの毒としても昔から有名です。ハンミョウは、人の歩く前を先へ先へと飛ぶことから「道教え」と呼ばれ、カラフルな体色をしています。ツチハンミョウとは全く異なる仲間です。



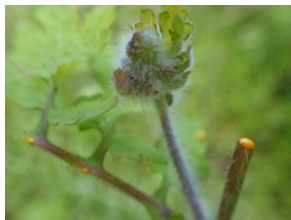
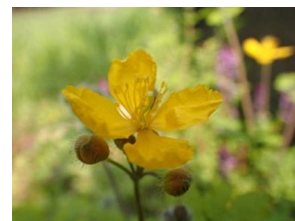
ツチハンミョウの特徴は、でっぷりとした腹と短い翅、青黒い金属光沢です。ゆっくり動く、このような特徴をもつ体長3cmくらいの虫を見たら手を出してはいけません。テントウムシのように関節から分泌する黄色い液にはカンタリジンが含まれ、水泡のできる皮膚炎を起こすためです。ちょっと小柄で丸い感じがするマルクビツチハンミョウという種もいます。

大きな腹から数千の卵を土中に産みます。孵化した幼虫は、脚が発達していて、草をよじ登り、花でハナバチ(マルハナバチやヒメハナバチなど花粉と蜜で幼虫のための団子を作って産卵するハチ)を待ちます。花に来た昆虫には、何であれ飛び乗ってしがみつきます。単独生活をするハナバチの雌にうまくしがみつくと、ハナバチの巣に入ったときに花粉団子に移動し、ハチの卵や団子を餌として蛹にまで成長し、翌年の春に成虫として出てきます。ハナバチに巡り会うのは、運に支配されるため、たくさんの卵を産むのです。

土中に穴をあけて巣とするハナバチが、遊歩道の法面をよく利用するため、成虫に出会う機会も遊歩道が多くなります。裸地であることが多い墓地も、ハナバチに人気がありますので、ツチハンミョウへの出会いの場です。

### 2. クサノオウ

黄色の花が目立つ路傍の草で、日当たりの良いところに見られる草です。したがって打吹山では見られる場所は、開けた道端に限られます。初秋に発芽し、春までには大きなロゼットの株となっています。



クサノオウは生活史も葉の形状もケシに似ています。分類もケシ科で、茎を折ったり葉を傷つけたりすると黄色い乳液が出てきます。ケシを傷つけて出た乳液からモルヒネ(アヘンから生成される麻薬性鎮痛薬)を作りますが、クサノオウも同じように鎮痛作用を持つ成分等、全草に有毒な成分を多く含んでいます。尾崎紅葉が胃がんの鎮痛のため、クサノオウを使ったことは有名です。乳液が皮膚に付着すると炎症を起こす場合がありますが、昔は皮膚の薬として使われたようです。植物毒を薬として使うのは漢方ですが、素人は手を出さないようにしましょう。

名称の由来ははっきりせず、乳液から「草の黄」、皮膚薬として使ったので「瘡(くさ)の王」、薬草の王様としての「草の王」など考えられているようです。伝承されてきた名称は、漢字ではなく音として受け継がれるため、意味がわからなくなったものは多くあるようです。三朝町にある「たきのく」という地名を聞いて意味がわからなかったのですが、現地に行ってみたら手前に滝があり「滝の奥」がなまったものだったのかと合点がいったことありました。文字として伝わってこなかったものの難しさがあります。